

昭和42年に赤岡町で歯科医院を開業して以来、39年間校医を務めるなど地域医療に取り組んでこられました。また、昭和49年からは(社)高知県歯科医師会理事、常務理事、専務理事、副会長、会長を歴任。38年間という長きにわたり地域の歯科保健医療の課題整理や対処方法の検討、県民の歯科に対する意識の向上、関係者の歯科保健対策の円滑な推進に邁進されました。さらに平成12年から11年間、高知県警察・高知県歯科医師会連絡協議会の会長として大規模災害等による身元確認の作業方法や用語を統一したデンタルチャートの作成など協力体制の構築に尽力されました。



恒石 定男さん
72歳 赤岡町

高知県歯科医師会の会長として、一貫して取り組んでこられたのが、歯と口の健康、「8020運動」です。歯が20本あれば、たいいていの食べ物なら噛み砕くことができ、おいしく食べることができます。実際、20本以上の歯が残っているお年寄りには認知症になる頻度が低く、寝たきりになることも少ないというデータがあるそうです。「みんなが元気で過ごすことができるよう、自分の歯を残していく治療をいかにしていくのが、歯科医師としての大事な仕事でしょうね」と話される恒石さん。

「今年の4月に『高知県歯と口の健康づくり条例』(愛称:歯ハハ条例)が施行されたことは、意義深いことだと思っています。これからは、この条例をもとに、どう実行していくのが大切になります。例えば、特定健診に歯の健康をチェックする項目を入れるなど、市でも取り組んでもらいたいし、市民の方には、痛みや何か症状が出る前に、定期的に歯と口の健康状態を見てもらおうようになってもらいたいですね」と話される笑顔の中に、歯の健康を意識する仕組みができたことによる期待と安堵感が垣間見えました。

歯の健康とは

歯と口の健康づくりは、豊かで幸せな人生と切り離すことはできません。健康を支えるもととなるのは、いくつになっても、しっかり食べられることです。超高齢化先進県といわれる高知県。自分の歯がなくなっても、きちんと治療をして、きちんと噛める状態にすることで、おいしいものを食べ、楽しくおしゃべりをして笑うことができます。一年に一回は歯の健診を受けてもらいたいです。

8020運動

80歳になっても自分の歯を20本以上保とう



黒岩 源さん
68歳 香我美町

昭和37年に香我美消防団に入団して以来、37年の長きにわたり献身的に消防活動に精励されるとともに、市民の生命と財産を守るという消防使命を遂行されました。また、平成7年からの4年間は消防団長として指揮を執り、団員の資質の向上に努め、消防行政の発展に寄与されました。

いかなる過酷な現場であろうとも「平常心」を忘れず、消防団活動に携わってきた黒岩さん。現場は常に危険と隣り合わせで、特に山火事のような大災害の時には、一刻も早い消火に努めることはもちろんのこと、団員の安全確保を第一に指揮を執られました。「大雨で水没しかけた稲わらを船で高台へ運び出したり、冬の凍てつく寒さの中、水が思うように出ず火を消すのに難儀した」と当時の苦労を振り返ります。

また、放水技術の向上と士気の高揚を図るため日ごろから訓練に精進し、昼夜をたがわずポンプ操作にも力を入れました。「心をひとつに一生懸命やり遂げ、表彰式でメダルをもらう時の、夕日に照らされた誇らしげな団員の顔が忘れられません」と、今でもジーンと胸に迫る、熱いものが込み上げてくるそうです。「退団して12年が経ちますが、現役を離れても地域を守る気持ちは変わりません。いろんな人に恵まれ、家族があつてこそこの受章。今後とも地域のために少しでも役に立てよう精進していきたい」と周りへの感謝を噛みしめていました。

今日も、奥さんと息子さんの3人で営むみかん作りに注ぐ愛情が、山北地区を代表する「安全」と「おいしさ」を兼ね備えた山北みかんの「源」になっていることでしょう。

消防とは

勇気、誇り、そして強い責任感が求められる、地域になくしてはならない組織です。地域防災の「要」として、平常時・非常時を問わず地域に密着し、住民の安心と安全を守るという重要な役割を担っています。

震災後、消防団活動のあり方が検討されていますが、まずは自分の命を守り、そして家族の安否確認ができて、初めて活動してほしいです。団員確保が難しくなっていますが、若い力をぜひ、地域にいかしてほしい限りです。

昭和34年、高知県立城山高等学校普通科を卒業し、株式会社四国建設センターに入社。昭和42年高知技研コンサルタントを設立し、建設業界で施工業者として実績をあげると同時に、公害対処の機械の開発に着手しました。振動騒音を排除した圧入という手法による杭打機を開発し、昭和53年にその開発販売会社として株式会社技研製作所を設立し、現在も社長として活躍されています。



北村 精男さん
70歳 赤岡町

さらに、平成19年から4年間は、(社)高知県工業会の会長に就任。「知恵と技術の地産地消」を合言葉に、会員企業の活性化に尽力されました。また、高知県が提唱する「産業振興計画」の策定委員、(財)産業振興センター理事として、各分野との連携を図りながら高知県産業の振興を主体に、県勢浮揚のために幅広く貢献されています。

初めて発明したのは、子どもの時に魚を突く「チャン」のゴムを二連にしたことだそうで、いろいろ試しては遊んでいたという北村さん。高校を卒業すると建設機械の仕事に就き、機械のオペレーターなどを経験しながら、幾多の現場をこなしてきました。

「建設現場の仕事で特に杭打ち工事は、騒音や振動などで周りに迷惑をかけることが社会問題になっており、いつも申し訳ないという気持ちを抱いていた」と当時を振り返ります。

独立してからもその気持ちは心を離れず、なんとか、周りに迷惑をかけないで環境に配慮した杭打ちの方法はないかと本格的に考えるようになり、1年をかけその考えを図面に。その図面をもとに株式会社垣内の社長と2年の歳月を経て共同開発しました。この開発した建設機械「サイレントパイラー」は、無振動、無騒音で杭を圧入するという世界初の手法で、これまでの大手企業が杭打ち工事は迷惑がかかって当たり前という常識を覆し、杭打ち技術の新たなスタンダードを確立した瞬間でした。今では、30カ国以上に広がり、国際圧入学会も創設しました。

現在は、岩盤をも打ち抜く「インプラント工法」を開発。地中深くまで打ち込まれた杭を、防波堤の骨組みとして活用することで、地震や津波に強い防波堤建設を国や県に提案されています。

今回の受章には「みんなの力でいただいたものなので、正直嬉しいです。今はまだ道半ば。これからやりたいことを決めているので、この受章を機にもうひと頑張りします」と意欲的で、長年の経験からあふれ出す「必要」を可能とするアイデアは、尽きることがないようです。

サイレントパイラー

杭打ち技術の革命。最先端のアイデアで走り続ける。

仕事の流儀

若い頃、はりまや橋の近くで、杭を引き抜く工事を見たときに、なかなか抜けないのを見て、地球が引っ張る力はものすごく強いんだと思ったことでした。この記憶はいつも意識していて、サイレントパイラーを思いついたきっかけになりました。打ち込んだ杭を機械でつかんで、引き抜かれまいとする力を利用して、杭を打てないかと発想したんです。

必要は発明の母といいますが、発明というのは、本業で深く探究してこそ得られるもので、その結果、世の中を変えていく機械とか、工法とかが生まれてくるんだと思います。



◀香南市赤岡町の香宗川沿いにあるメモリアルパーク(赤岡町須留田)。(株)技研製作所所有の赤岡町北部工業団地の一角は、杭打ちの実証場として、敷地の周りを杭で囲んでいます。その中は、植栽がされ公園のようになっています。北村社長は「ゆくゆくは、杭の科学博物館を建設し、地域の活性化につなげたい」と話されました。

11月3日の「文化の日」、秋の叙勲受章者が発令され、香南市では北村精男さん、恒石定男さん(赤岡町)が旭日小綾章を、黒岩源さん(香我美町)が瑞宝単光章を受章されました。



11月17日に香我美町岸本で撮影したナベツル。

秋の叙勲